

平和 ～私にできる事～

浦添市立神森小学校 六年

大城 未歩

「ブーン」

「うわ、ハエだ。気持ち悪い。」

「そんな一匹きでさわがないの。戦争の時はね、死体にうじ虫やハエがいっぱいいたんだよ。戦争の時は、洋服を着がえないから、洋服をはずしたらぬい目は全部しらみだらけ。洋服だけでなく、頭にもしらみやのみなどがいっぱいいてね。一本の毛にたまごがいっぱいくっついていたんだよ。」

そんな話をしてくれたのは、十月で七十五才になる私のおばあちゃん。おばあちゃんは小学校三年生のころ戦争を体験しています。

「あの時は本当にこわかったよ。明かり一つない夜に、みんなはだしで、もとぶの山の中をにげまわっていたんだよ。」

「どうして明かりがないの?」

「それはね、明かりがあったらそこに爆弾を落とされるからだよ。でも、ゆいいつあつた明かりはね『照明弾』といって、アメリカ軍が、夜、辺りを照らして、どこに爆弾を落とすか確認する明かりだよ。」

「その明かりが照らされる所に落とすしていくの?」

「そう。『かんぼうしゃげき』といってね、船から爆弾のこうげきをしてきたんだよ。『鉄の暴風』といわれるくらいはげしいものだったよ。」

「ふうーん」

「その、かんぼうしゃげきは、爆弾の破片が落ちるんだけど、私と兄の子供にケガをさせないように、おばあちゃんのお父さんが上におおいかぶさっていてね」

「こうげきの時ってどこにいたの?」

「こうげきの時はね『防空こう』の中にいたんだよ。おばあちゃんのお兄さんは、けいさつ官でみんなを守るためにこうの入り口にいたんだけど、かんぼうしゃげきのはへんが飛んできて、それが心ぞうの部分にささってしまつて目の前で死んでしまったんだよ。その後、また体は温かかったけどすぐに近くの畑の横にうめたんだよ。お兄さんの顔を見るのが怖くて、白くなった足のうらを見ていたのを覚えているよ」

と切なそうに語っていました。

でも亡くなったのは、おばあちゃんのお兄さんだけでなく、たくさんの方がケガをし、亡くな

ったそうです。その中には、血だらけの三、四才くらいの子が、亡くなったお母さんの上で泣いていたといいます。周りは全部そんな様子ようだったけど、おばあちゃん達も逃げなくてはいけないので助けられなかったといいます。

私がおばあちゃんならと思うと心が苦しくなりました。

でもおばあちゃんは、私が想像する以上に言葉では表せないくらいの痛みを心にせおっているんだなあと思いました。

頭や洋服がしらみだらけだったら、どうなんだろう。

雨の中、夜、はだしで山の中を逃げまわるって、どうなんだろう。

いきなり爆弾が飛んできたら、目の前で家族が死んでいったら、私はどうするんだろうと、どんどん、どんどん考えていくと悲しくて、怖い気持ちでいっぱいになりました。

おばあちゃんは十才の時に戦争を体験してそれから六十五年たった今でも一ぴきのハエを見ただけで戦争の事を思い出すなんて、どんなに月日が流れても心の痛みは消えないんだなあと思いました。

おばあちゃんの体験談を聞いて、どれだけ戦争が多くの人々を苦しめたのか、改めてわかりました。

でも戦争は悪いものだという事はわかりましたが、どうすれば二度と戦争を起こさず、平和な世界をつくれるのでしょうか。

私が考える平和は、平和の『平』は「たいら」とも呼びます。その「たいら」の意味は、でこぼこやかたむきがない様子。

平和の『和』の意味は、人々が仲良くまとまっている様子。

私は、平和というのは差別がなく、みんな仲良く暮らす世界が平和だと思います。

まずは、自分の友達・クラス・学校と小さな平和から大きな平和に広げていきたいです。そのためにも、今回おばあちゃんから聞いた話は一人でも多くの友達に伝えていきたいです。

私の小さな行動が、平和という世界をつくれる気がします。